

「息ながとうか」

私が子供の頃に使っていた大分弁で、「息がどれくらい続くか」という意味だ。当時、大分県の海で素潜りをしてよく遊んだ。そして、潜りながら思った。たびたび海面に上がらなくても、息が続くようにならないかなあ。

最近、スキューバダイビングの免許を取った。そして、世界が変わった。海中で息が出来る。考えてみると、とんでもなくすごいことである。

水面下30メートルくらいまで潜っていく。魚屋さんで見たところがある魚が泳いでいる。普段は切り身になって売られているような魚も、フワフワと泳いでいる。

当然、彼らは野生だ。自然児と言ってもいい。近寄って行くと逃げるのではなく、こちらを向いて泳ぐ。警戒しているのか、威嚇しているのか。さらに近づくと、さあゝと体をかわして、去っていく。

実は、わたくし、このスキューバダイビングをなめてかかっていた。「あんなのスポーツじゃないよ。フワフワしているだけで、体力なんて使わないだろう」と……

ところがどっこい、水中を無重力状態で漂っているだけなのに、陸に上がると、ぐったり疲れている。かなりの体力を使っているよ。うなのだ。1日3回も潜ると、その夜は、飯を食ってボタンキュー

である。

その海が、冬は素晴らしく美しくなる。プランクトンが減り、透明度が増すのだ。「冬の寒い時に潜るの？」という声も聞かぬが、海は、そんなに冷たくならないんだよ。どちらかというと、海から上がった後のほうが寒い。専用のドライスーツも着ているしね。それに、海の中では目の前の光景に興味津々。寒さなんて吹っ飛ばよ。さあ、出かけましょう、冬の海底体験ツアー！

【朝日新聞・マリオン】

2006年12月27日掲載